

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19760454

研究課題名（和文） 日本古代建築造営史における「様」の研究

研究課題名（英文） Study on the Tameshi of Ancient Japanese Architectural Construction

研究代表者

小岩 正樹（KOIWA, Masaki）

早稲田大学・理工学術院・助手

研究者番号：20434285

研究成果の概要：

本研究は、古代日本の建築造営において利用された「様（ためし）」と呼ばれる計画資料に注目し、事例の収集と各々の造営状況の解明を通じて、「様」の機能とその授受関係にみる造営過程を明らかにしたものである。「様」は計画や技術などの情報を伝達する役割を帯びると同時に、その制作者に対しては榮譽を与えうる社会的な意義も兼ね備えていた点が確認でき、結果「様」を介した古代建築造営の一つのかたを提示することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	180,000	1,280,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、 建築史・意匠

キーワード：建築史、日本古代史、意匠、様式、建築生産、設計図書

1. 研究開始当初の背景

近年の日本建築史学は、百年以上続けられた研究史のなかで遺構の確認やその価値判定を含めた通史の編年作業が一通り完成し、今後は史的解釈を主軸とした研究の一層の深化が求められる状況にあると考える。本研究が対象としている古代建築の生産史では、申請者が勤務する早稲田大学建築史研究室の代表者であった故渡邊保忠博士の学位論文『日本建築生産組織の研究』（私家版、1959年）によって通説が整理され、また浅香年木博士による『日本古代手工業史の研究』（法政大学出版局、1971年）や、永井規男博士に

よる「歴史のなかの建築生産史システム」（新建築学大系編集委員会編『新建築学大系 44 建築生産史システム』所収、彰国社、1982年）が発表されるが、その後は大枠としては長らく進展が見られなかった。このようななかで、本研究課題は古代の建築生産において利用されていた「様（ためし）」と呼ばれる計画資料に注目し、その考察を通じて日本古代建築史学における学術上の萌芽的、発展的研究を目論むものである。

「様」とは、古代日本において造形物の製作時に介された資料と推測されているものであり、建築を含め、絵画や彫刻、兵器、衣

服などの形態の伝達に使用されたことが判明しているが、いずれも文書資料中に登場する語として確認されるに過ぎない存在である。これまで美術史と建築史の分野を中心として研究が行われてきたが、美術史学では「様」の遺物と目される絵図があるために、その使用を含めた製作の過程まで研究が進められていることに対し、建築史学では「様」の実物への推測が模型、図面、仕様書など一定せず、建築の造営に果たした意義を計りかねていた状況であった。

すなわち、「様」は従来の研究評価が途上であったが、設計者の意図をはじめ、施工者への情報伝達に到るまで、建築造営の全体像を俯瞰することのできる対象として、研究推進上極めて貴重な資料であると見込まれた。そのため、この「様」の存在に注目して、建築生産史上の意味について考察した。

2. 研究の目的

本研究課題は、古代日本を研究対象とし、「様」と呼ばれる計画資料の検討を通じて、建築建造の社会的背景について解明することを目的としている。建築造営の背景を検討することは、建築史学のうちでも建築生産史学と呼ばれるが、特に古代文明における建築造営では多くの組織と技能が関与し、人員や材の徴発などが集権的な政治体制のもとで造営が進められるため、研究は当時の国家機構までも想定する必要がある。そのなかで本研究が対象としている日本古代の建築生産は、国史などの文字資料が残存する点、建築遺構が兼存する点、現在に到るまでの文化的な継続が認められる点などから、古代社会の例として建築史上貴重な研究分野である。この日本古代を対象とし、造営工程において中心的な位置を占めた可能性が高い計画資料「様」に焦点を当て、建築史における実物の比定と同時に、それが帯びていた機能としての規範性を明らかにすることを目指した。つまり「様」とは、特定の資料形態のことを指すのではなく、ある状況下において特定の役割を担うことではじめて呼称されるものと仮定をたて、その状況に対し検討を加えることで、規範性・手本としての性格があったことを実証するものである。

本研究課題では、8世紀を中心とする奈良時代を検討の時代としているが、同時期には短期間に多くの造寺活動が行なわれたことが知られている。その造営活動の背後に「様」の機能を確認することができれば、ひとつの建築造営史上の特徴として位置付けることができ、古代日本の社会において「様」を介して建築造営が行なわれていたという建造プロセスを示すことができる。したがって、研究は「様」の性格とその機能の解明に集中

し、「様」を介することで成立していた建築生産のあり方について考察することを中心とした。

3. 研究の方法

本研究課題の遂行に当たっては、古文書の記述を検討する文献調査に集中した。開始前までにいたる準備状況から、建築の「様」が記載された史料の事例は収集していたが（表参照）これらは編纂作業を経てまとめられた国史や寺史などの史書と、建築造営の際に現場にて取り交わされた符帳などの書付の、二種類の性格へ分類できることが判明した。前者は造営過程における計画時の段階、後者は施工時の段階について「様」の機能の解明が期待でき、それぞれの側面から研究を進める方法をとった。

表 古史料に登場する建築関係の「様」一覧

本文	言及年	所収
戊申年送六口僧、名令照律師弟子惠忽、令威法師弟子惠勲、道嚴法師弟子令契、及恩率首真等四口ノ工人、并金堂ノ本様奏上、今此寺在是也	天平19年 (747)	『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』
一、釘六十三隻 八寸八隻 六寸册隻 五寸十五隻 右、依員検納如件、但不如様之	天平宝字6年 (762)	『正倉院文書』
一、可作三丈殿材 桁 古麻比 扱 右材、依員并様、早令作、々畢即次下桁戸歩板等令作	天平宝字6年 (762)	『正倉院文書』
右大徳下坐之更改事、宜承知状、如先様勿令作	天平宝字6年 (762)	『正倉院文書』
一、可令作戸二具 右、依先様、早速令作進上	天平宝字6年 (762)	『正倉院文書』
景雲年、勅西大寺、造八角塔様	神護景雲年 (767-770)	『延暦僧録』 思託伝
一、奉造東西少塔殿事、 右以去神護景雲年中、為安置御願少塔、勅令進殿様、而大工等造様甚醜、依此法師実忠、改大工等作様、更様造出五尺余上、奉造如前 依此様諸寺皆營造也	神護景雲年 (767-770)	『東大寺要録』 「東大寺権別当実忠二十九箇条事」
其破損者、農閑修理、但長門国駅館者、近臨海辺、為人所見、宜特加勞、勿減前制、其新造者、待定様造之	大同元年 (806)	『日本後紀』

文書に記述された建築の「様」について検討することは、とりもなおさずその建築形式の比定が前提であり、その上で規範性についての比較がはじめて可能となる。しかし記述には詳細な形式が含まれないことが多く、また日本における古代建築はその多くがすでに現存しないため、建築形式の考察にあたって情報は十分には得られなかった。そのため、このような情報の不足に対応するため、関連する美術史や考古学などの隣接分野における研究状況も多く確認し、研究蓄積を広く確認することで、適宜補足しつつ進めた。

4. 研究成果

建築造営における「様」の役割と性格の解明を目的として、事例の収集を継続して行い、収集した事例をもとに、建築造営の状況を復元して、造営現場における「様」の機能について、それぞれ多角的に検討を加えた。

研究の方法としては、「様」の作成主体の意図・立場や、「様」の授受関係を追うことで進め、また建築遺構（史料、実際の建築）にみる形態の確認も合わせて行った。

検討は、収集できた事例の結果、主に八世紀中後期が中心となった。得られた成果をまとめると、以下となる。

(1) 「様」の事例の拡大

事例収集の結果、史料上に明記される「様」の数は少なく、また登場の仕方に偏りがあることが分かるが、これは「様」は建築造営の際に授受された具体的な資料であることから、国史などの史書に取り上げられにくいためと考えられる。そこで、国分寺や大安寺といった古代史上よく知られた建築造営の記録を取り上げ、造営図書の比較検討を行い、解釈を拡大するとともに、「様」の性格の解明の助けとした。結果的に、古代造営のなかで「様」と類似する手本・参考資料がより一般的に用いられていた可能性を示唆した。成果は学術論文として投稿し、学会発表を行った。

(2) 小塔殿の造営における「様」について

一般に設計から施工へと段階的に進行する造営過程のなかで「様」の果たした機能を明らかにすべく、まずは計画段階において使用された事例を取り上げて検討した。寺院建築の造営に際して僧侶実忠が作成した小塔殿の「様」を対象とした結果、「様」は発願者との関係を結ぶ計画資料として、意匠決定に貢献していた点を確認した。また「様」はその作成者に対しては、造営組織内における地位を保証すると同時に、その造営の持つ意義の大きさに従って荣誉となることを論じ、「様」の帯びていた社会的な影響力について検討した。本成果については、学術論文としての投稿と学会発表の準備を進めている。

(3) 西大寺塔の造営における「様」について

西大寺塔の「様」を僧侶思託が作成したという記録をもとに、西大寺塔の造営計画において思託の果たした役割と「様」の機能について、造寺司や寺家、詔勅との関係を通じて考察した。結果、本来の造営機関である造寺司ではなく僧侶である思託が設計を行ったことの特異性を述べ、それは「様」を作成することが詔勅であることによって成り立つ構造であった点を指摘した。成果は学術論文と

して投稿し、学会発表を行った。

(4) 駅建築の造営における「様」について
古代駅制の施行に伴い建造された駅家建築について、「様」によって造営するという記録を取り上げ、事例の収集確認と、駅家建築に求められていた性格について考察した。結果、駅家建築には共通した設計指針が示された可能性があることを確認し、また意匠的效果によって駅の利用者と目された外国使節へ国威を示す方針と、一方でその維持管理の負担を省力化する方針の、双方を「様」によって示したことを明らかにした。成果は学術論文として投稿し、学会発表を行う予定である。

(5) 石山寺の造営における「様」について

「様」を介して進められた『正倉院文書』に残る天平宝字期の石山寺造営記録について、寸法値や製材・運搬過程が分かる約千三百余りの建築材料記録に着目して、史料の読解と内容の整理を行った。施工段階において使用された「様」の事例として貴重であり、本事例については、継続して分析・考察を行ってゆく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

(1) 小岩正樹「古代における駅家建築の様について -日本古代建築における様の研究 その4-」、『2009年度日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)』、F-2、2009年、査読無(掲載決定)

(2) 小岩正樹「思託による西大寺塔造営について -日本古代建築における様の研究 その3-」、『2008年度日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)』、F-2、2008年、pp.5-6、査読無

(3) 小岩正樹「国分寺および大安寺造営における図と様の関係について -日本古代建築における様の研究 その2-」、『2007年度日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)』、F-2、2007年、pp.7-8、査読無

[学会発表](計3件)

(1) 小岩正樹「古代における駅家建築の様について -日本古代建築における様の研究 その4-」、日本建築学会 2009年度大会、2009年8月28日、東北学院大学(発表決定)

(2)小岩正樹「思託による西大寺塔造営について -日本古代建築における様の研究 その3-」、日本建築学会 2008 年度大会、2008 年 9 月 18 日、広島大学

(3)小岩正樹「国分寺および大安寺造営における図と様の関係について -日本古代建築における様の研究 その2-」、日本建築学会 2007 年度大会、2007 年 8 月 29 日、福岡大学

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小岩正樹 (KOIWA MASAKI)
早稲田大学・理工学術院・助手
研究者番号：20434285

(2)研究分担者

該当者なし

(3)連携研究者

該当者なし